



マイレボTALK

MY HUMAN REVOLUTION



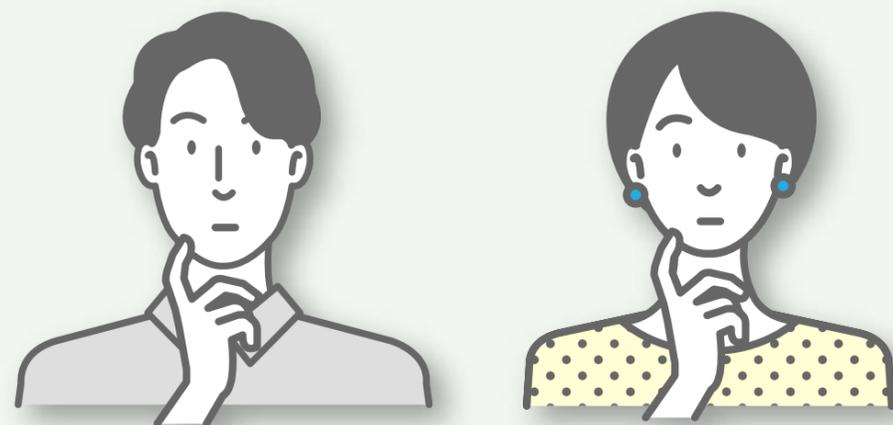
第5巻 「勝利」の章

本年は

「希望・勝利の年」

私たち青年部にとっての

「勝利」とは何か？



「勝利」の章の舞台 1961年

■ 大阪事件（※）による裁判が大詰めを迎えようとしていた

（※）1957年7月3日、創価学会の台頭を恐れた当時の検察権力が、青年室長だった山本伸一を、不当に逮捕・勾留した事件

男子部総会 (11月5日、東京・国立競技場)
「国士10万」結集の実現

女子部総会 (11月12日、横浜・三ツ沢の競技場)
初の野外での総会、8万5000人結集

→「国士10万」の「国士」とは何か？

「国士訓」 (青年よ国士たれ)

— 戸田先生 —

「青年よ、一人立て！ 二人は必ず立たん、三人はまた続くであろう。かくして、国に十万の国士あらば、苦悩の民衆を救いうること、火を見るよりも明らかである」

→山本伸一は真っ先に、その実現に立ち上がった

「国士」について

「国士」というと、一般的には「国家のために身命をなげうって尽くす人物」という意味があるが、「そこには、青年たちへの、戸田の限りない期待が込められていた。つまり、一国の、そして、世界の民衆の幸福と平和を築きゆく人材を、彼は『国士』と表現したのである」。

(196 ページ)

「武力」と「精神力」

歴史を振り返れば、改革に立ち上がった青年は数多くいたが、その大半は、武力によるものだった。

「創価の青年が、彼らと、明確に一線を画すのは、武力とは対極に立つ精神力をもって、人間の尊厳を守り、民衆の幸福と世界の平和を打ち立てようとしていたことである」

(225 ページ)

山本伸一が考える「青年の勝利」、 ① 姿勢

「新しき時代の幕は、青年が自らの力で、自らの戦いで、開くものだ。他の力によって用意された檜舞台^{ひのきぶたい}など、本物の師子が躍り出る舞台ではない。次代のリーダーたらんとするならば、その舞台は、自らの手で勝ち取る以外にない」

「過去の青年部が、いや、壮年も、婦人もできなかったことを、新しき若人の力でやってみせたのである」 (250 ページ)

『青年の勝利』 ② 個人と組織

「この総会を真に荘厳するものは、それをめざして、一人ひとりが何を成し遂げ、自身の人生に、いかなる勝利の歴史を打ち立てて集ったかである。

どんなに盛大な催しや儀式も、見方によっては一つの『化城』にすぎない。その本当の目的は、それらを通し、一人ひとりが自身に挑み、勝って、わが胸中に、堅固なる『生命の城』を築いていくことにある」

(202 ページ)

組織の目標、拡大

組織の **勝利**

夢、悩み、目標

自分の **勝利**

広宣
流布

勝利 は
あなたから始まる！

『青年の勝利』 ③-1 試練

勝利に向かう中で試練はつきもの。
第5巻の執筆時にも難が競い起こっていた。

- 連載期間 1996年2月12日～8月31日
- 週刊誌等によるメディアや政治権力、そして宗門が結託して熾烈な学会攻撃を行っていた

→試練に対して、どう立ち向かえばいいのか？

『青年の勝利、 ③-2 試練』

判決公判を控えていた山本伸一は語ります。

「(大阪事件の裁判は) 無実であるにもかかわらず、何か大きな犯罪行為があるかのように喧伝けん でんし、罪おとしいに陥れようとすることは、古来、権力者の常套手段じょうとう しゅ だんであります。今回の裁判は、長い広宣流布の戦いを思えば、**さざ波、のような小難**にすぎません。今後も、こうしたことは、幾度となくあるでしょう。しかし、何も恐れることはありません」

(276 ページ)

「仏法は勝負である。なれば、人生も勝負であり、広宣流布の道もまた、勝負である」

「その勝利とは、自己自身に勝つことから始まり、必死の一人から、大勝利の金波の
怒濤^ど^{とう}は起こる」

(181 ページ)